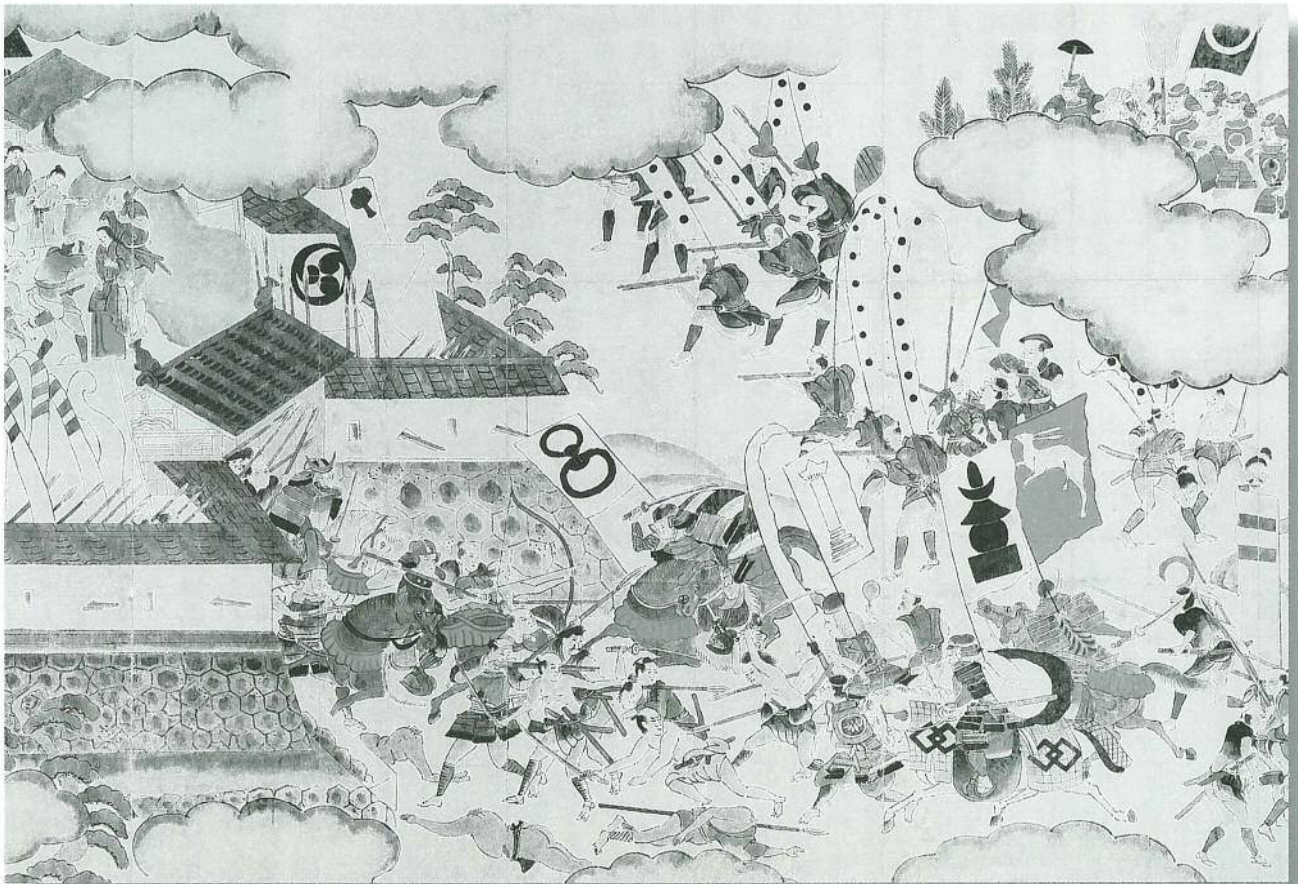


歴史館だより

題字 最上家第47代当主 最上公義氏



- 「最上屏風」の由来について
- 新出の白鳥十郎長久書状
- 最上義光歴史館サポーター「義光会だより」No.2
- 研究余滴 「文禄四、五年の謎」

No.19
2012年3月発行



最上義光歴史館

「最上屏風」の由来について

宮島新一

「最上屏風」がほんとうに「大坂夏の陣」を描いたものか、という疑問を払拭するのが小文の目的である。

山形市の光禪寺に伝来していた原本は残念ながら明治二十七年の大火で焼失してしまった。原本が残っていたれば制作年代がある程度推定できるので疑問が解消できたかもしれないが、摸本からはそうした手立ては失われている。その結果、生々しい合戦の実態を記録した貴重な図であるにもかかわらず、絵画資料としての位置づけは不安定なままである。ほとんどの合戦図が後世の想像図に過ぎないだけに、いっそう原本の焼失が惜しまれる。

そのかわり、もう一つの大坂夏の陣図屏風のように大名の黒田家が秘蔵してきたのではなく、寺院に伝来したために模写が容易だったのだろう、数多くの摸本に恵まれている。それにともなう他の合戦図にはない豊富な記録にも恵まれている。川瀬同氏は「文献に見る光禪寺蔵大坂夏の陣屏風図」（山形郷土史研究協議会『研究資料集』十一年・十七号）において記録類を網羅するとともに、そこに登場する人物の考

証もあわせて行なっている。「最上屏風」に関するもとも基本的な文献として小文でも参考にさせていただいた。それによれば、「最上屏風」に関する最初の情報は意外な著名人によって記録されている。『解体新書』で有名な医師、杉田玄白は『いくさの絵の記』（『大日本史料』第十二編十九）に、「五十二年前」のこととして次のように記している。

「童部なりし時物学びたりし桐江先生と言えり人の、一日賓客に（中略）、慶長末の一年難波津の御合戦ありしとき（最上殿の）御内の武夫ばかり軍の御供をして罷り上りたるが、彼地にてはなばなしき功名せし。その武夫共の戦の仕様をそのまま絵に写し主のもとへ土産にせしを彼国に残し伝へ侍る（中略）。その絵を見るに、武具せし人少なく、多くは素肌者なり（中略）。その屏風見し人の申したるよし語られたり。」
寛政十二年（一八〇〇）七月の五十二年前、すなわち、寛延元年（一七四八）には玄白はまだ十六歳だった。「五十年ほど前」ではなく、「五十二年前」とはつきり記しているところをみると、

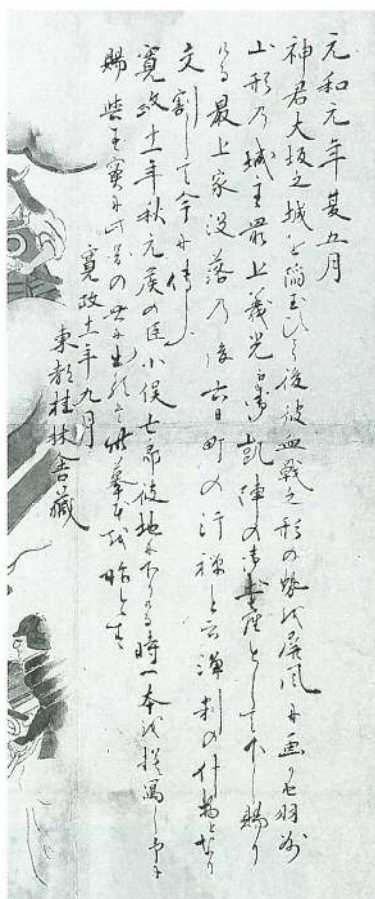
玄白はよほど記憶力がよかったようだ。晩年の玄白に『鶴斎日録』という日記があるが、若い頃から日記をつけていたのかもしれない。その内容は信じてよいだろう。ただし、日録の寛政十二年には屏風に関する記事は見出せない。そのかわり、文化元年（一八〇四）五月四日の条に、大坂の陣に思いを馳せて太平の世に暮せる感慨を書き残している。

玄白が少年の日のできごとをまざまざと思い出したのは、先の文章に続いて「今年思わずも或人此図を出し（中略）、此頃はを写し得侍りたるとて見せ給えり、翁これを見るに彼の桐江先生の語り給うに露違わず。」とあるように、子供のころに聞いた話とびつたりと一致する図が目前に出現したことの驚きによるものであった。

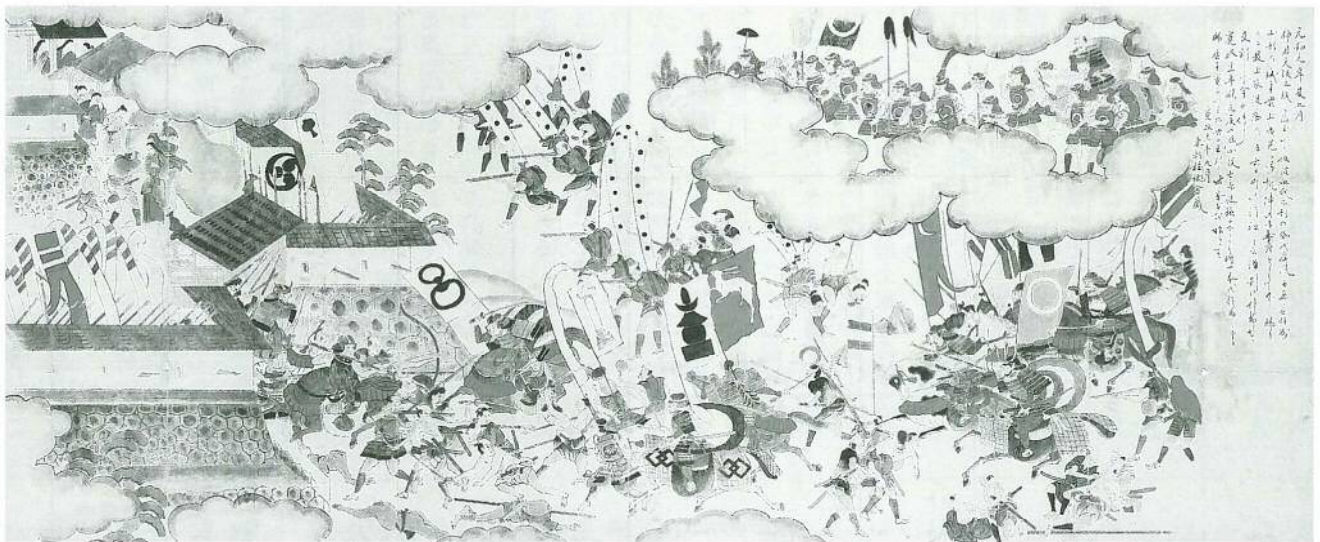
この図が広く流布するようになったのは、山形・上山城本の桂川中良（桂林舎）による寛政十一年九月の由緒書に「寛政十一年秋、秋元侯家臣小俣七郎彼地に下りける時、一本を模写し予

に賜與す、実に此図の世に出るは此摹本を始とす」とあるとおりで、杉田玄白はそれから一年もたないうちに目にしたことになる。図を写し帰った小俣七郎義陳は当時山形藩主であった秋元家の江戸詰めの家臣で、その妻と桂川中良とは父が同じという関係にあった。一図を得た中良は玄白とともに『解体新書』の翻訳にあたった甫周の弟にあたり、父の桂川甫三も玄白の友人で『解体新書』を將軍家に献呈した奥医師であった。

杉田玄白は享保十八年（一七三三）に小浜藩医の子として江戸藩邸、矢来屋敷に生まれたが、幼年時代を小浜で過ごし延享二年（一七四五）に父とともに江戸に戻っている。桐江先生は江戸での最初の学問の師ということになる。玄白は寛延二年（一七四九）頃には宮瀬龍門および奥医師の西玄哲に入門しているので、桐江先生への師事はわずか三年たらずだったことになる。桐江先生は年少の杉田玄白がそば近くで師事しているからには、多少なり



大坂夏の陣図 (通称: 最上屏風) 部分
上山城蔵



大坂夏の陣図（通称：最上屏風）上山城蔵

とも小浜藩とのゆかりがあった人物に違いない。桐江先生のもとを訪れた「屏風を見た人は」、その存在が広く知れわたる以前に見ている。その人は山形の人か、もしくは山形にそうした図があることを聞き及んだ人の、どちらかである。図を写し帰った小侯義陳の例からすると、地元の人ではなかったように思われる。

玄白の記述は、実際に屏風を見た人が桐江先生に語った内容を、桐江先生がある賓客に話し聞かせたかたちになっている。したがって桐江先生は摸本が流布するより前に、いち早く屏風の存在を聞き知っていたことになる。ここから桐江先生が「最上屏風」の謎を解くキーパーソンとして浮かび上がってくる。だが、残念ながら桐江と号した人物が誰かはつきりしない。参考のために桐江を号とした人物を列挙してみる。

一、田中桐江（一六六三～一七四二）は出羽鶴岡の出身。天和三年（一六八三）に江戸に出て朱子学を学び、柳沢吉保に仕え、そこで获生徂徠と出合い親交を持つ。正徳三年（一七二三）に吉保の奸臣に対して刃傷におよび奥州に逃げ落ちたが、高槻・光徳寺の僧、

独麟の勧めにより、享保九年（一七二四）に仙台から摂津池田に移り「呉江舎」を設立して多くの門人を育てた。富永仲基もそこで学んでいる（『新編庄内人物辞典』）。ただし、墓誌には「武陵に生まれ父田中氏は豊州築城主の臣、忽朝卓爾として遂去し奥に適す、十二年にして武陵に還る」とある。余談になるが、鶴岡出身の日本美術史研究者、故田中一松氏は田中桐江の子孫にあたり、関係資料を本間美術館に寄贈している。

二、菊池桐江は明和六年（一七六九）版の『古今諸家人物志』に名が見え、徂徠門下の漢学者である入江南冥に学んでいる。名は忠充、字は子信、武助とも大助とも称した。江戸の人で銀座に住んでいた。著述に『桐江山人集』、『唐明詩聯集』（元文元年・一七三六刊）、『文章雋譜』（宝暦八年・一七五八刊）などがある。

三、三田義勝（一七〇一～一七七七）は蘭室とも号した。享保七年（一七二二）に江戸詰となり、丸亀に帰国して藩儒となる。

四、平林惇信（一六九六～一七五三）は書家。細井広沢門人で静斎とも号す。弟子が二千人もいたとされる（三田村竹清『近世能書伝』）。

四人のうち田中桐江は後年には関西に居を構え、寛保二年（一七四二）に世を去っている。玄白の師であった可能性はない。残る三人の中では秋田藩儒の入江南冥に学んだ菊池桐江が有力視される。生没年は不詳だが、師

の南冥が明和二年（一七六五）に八十歳で没していることから推測される年齢や、著述の出版年からすると玄白が師事することは可能である。彼が著わした『桐江山人集』三巻の存在がわかれば、その当否がもう少しはつきりするだろう。

小川貫道氏は「漢学者伝記及著述集覧」において、菊池桐江を「水戸藩儒」と記している。水戸の彰考館総裁の安積澹泊と交流のあった新井白石（一七二五没）は仙台の儒者で画家の佐久間洞敵とも親しかった。白石の洞敵宛て手簡の一つに、「送桐江翁歸江都の御作二首ともに可然候」という一文が見出せる。新井白石は主君であった堀田正仲の山形移封に従い、貞享三年（一六八六）に『山形紀行』を著わしたとされている。新井白石はしばしば大坂の陣について軍談を講じ、同陣に関する記事を多く書き残している。桐江先生に最上屏風について語った人物が新井白石だったとすれば面白いが、ここでの桐江翁は仙台から江戸に帰っていることから田中桐江の可能性が、つよい。性急な判断は避けなくてはならないだろう。

杉田玄白の聞き書きでもっとも注目しなくてはならないのは、「最上殿の御内の武夫が軍の御供をして、はなばなしい功名をあげた。その武夫どもが戦の仕様をそのまま絵に写し、主のもとへ土産にした。」という一節である。ところが五十二年後に玄白に摸本を見せた人物は「大御神（徳川家康）」が最

上家親に給う所の」と語っており、この間に由来に関してすっかり変わっていることに注意したい。

こうした伝承は明和六年(一七六九)正月の『山形棚佐賀志』に名が見える『山形風流松の木枕』において、「家康公より義光へ被下置候御枕屏風此寺の御什物也」とあるので、すでに山形において形作られていたことがわかる。歳月の経過とともに事実が薄らいでゆくにつれて、重々しい由緒が付け加わる典型である。ここでは最上家親ではなく、父の義光が拝領したことになっており、上山城本も含めてそう伝える記録がほとんどである。しかし、義光は大坂夏の陣以前に世を去っており、はじめから馬脚が露われている。「家康から拝領云々」は無視してよいだろう。だが、同時に大坂夏の陣図であることまで否定するのは行過ぎである。

寛延元年(一七四八)の玄白の聞き書きの重要性は伝承が粉飾される以前の、当初のかたちを伝えているところにある。大坂の陣に最上家親の家臣が参戦していたのは事実で、二人派遣されている。『最上家伝覚書』(国立公文書館)によれば、「大坂御陣中為伺御機嫌、武久庄兵衛・富田加兵衛と申者、両度為使者差上候」とあって、二人とも冬と夏の両陣に「使者」として参戦し、その功績により富田加兵衛が三百から六百石へ、武久庄兵衛は五百から千石への加増となっている。

武久庄兵衛は最上家改易後には武勇を認められて松平忠輝の家臣を経たあ

と、寛永九年(一六三二)に川越藩主酒井忠勝の預かる所となり、同一年の藩主の小浜へ移封に従い、敦賀奉行を勤めるなどして、承応三年(一六五四)に没している。小浜藩に「大坂夏の陣図」を描かせたと思われる人物の子孫がいたのである。

武久家については「新稿 羽州最上家旧臣達の系譜―再仕官への道程―」(最上義光歴史館)を著わした小野末三氏がとても興味深い事実を明らかにしている。すなわち、今日国宝となっている「伴大納言絵巻」が寛政九年に酒井家に召し上げられるまでは武久家が所持していたこと、『若むらさき』(大田南畝編「三十幅」所収)に「絵巻物者賜於最上家焉」と、最上家から賜ったと記されていることなどを紹介している。かねがね、どういう経緯から武久家が「伴大納言絵巻」を所持することになったのか、不思議に思っていた。そこで、次のように考えてみた。

武久庄兵衛の武功はすでに加増によつて報われている。絵巻を賜ったのは「大坂夏の陣図」との交換であり、献上に対する褒美である。参陣を許されなかった家親はなんとしてでもこの図が欲しかったのだろう。後に「大坂夏の陣図」が最上家を出て最上義光の菩提寺に移った事情については、重要文化財の狩野宗秀筆「遊行上人絵伝」十巻が家親の子の義俊が亡くなる寛永八年(一六三一)に、光明寺に再寄進していることが参考になる。本図も同時に光禅寺に寄進されたのであろう。

最上家改易の原因となった義俊が最期に臨んで、父祖の足跡を山形の菩提寺に残そうとした心情を察してやりたい。この図をめぐる多くの伝承の中では、もっとも早い杉田玄白の聞き書きを何よりも尊重しなくてはならない。それに従えば、原本は最上家から大坂夏の陣に派遣された武久庄兵衛昌勝が主君への土産として描かせた可能性が大きい。他の合戦図のように六曲屏風ではなく画面が小さいものにもかにも土産にふさわしい。最上家改易後に武久庄兵衛が小浜藩に仕官したことから、同じ藩の藩医の子供の耳にも正確な情報が入ってきたのだろう。

五輪塔の旗指物が目立つことから本図を最上義光の合戦を描いたとする指摘はすでに江戸時代からある。そのせいで本図を大坂夏の陣図とする意見が抑えられてきた。だが同時に、同じ旗指物で大坂夏の陣に参戦した武士がいたことも考証されている。現存する幾多の合戦図を見ればわかるが、誰も知らない出羽での局地戦を「リアルタイム」で描きとどめるような行為があったとはとても考えられない。

別の秋元家臣、国友恆足は「山形光禅寺蔵屏風合戦絵考」において、文化八年(一八一)八月晦日に光禅寺にて実見したときの印象を次のように記している。「屏風は二枚折り(中略)、地は金紙にて彩色も亦あしからねど、年をふるままに今はうすらぎ(中略)、いと古雅なり」

「古雅」という言葉が死体が横たわり、

手に首を提げる武士が描かれる合戦図に似つかわしいとも思われないが、その言葉にふさわしい場面が画面の左上片隅に見える。城内の中門あたりに並ぶ三人の男子の姿がある。先頭の子は末期の水であろう、竹筒の水を椀に入れて傷ついた兵にさしだしている。二人目は目を覆い、三人目は口元を覆っている。

彼らの鬘の形は上流階級の子供を意味する「稚児輪」らしく、後頭部に二つの輪を結ったように見える。牛若丸の髪型と言えはわかる人がいるかもしれない。肖像画では上級武士の子供の風俗として室町時代末期にしか見ることができない髪型である。豊臣秀頼の周囲には古い風俗が残されていたことを物語っている。

結論を言えば、本図は大坂夏の陣の目撃者、武久庄兵衛が描かせた希有な合戦図である。

略歴

宮島新一 (みやじましんいち)

一九四六年愛知県生まれ。文化庁、京都・奈良・東京・九州国立博物館などを経て、二〇〇七から二〇一一年まで山形大学教員。研究分野は日本絵画史。最上義光歴史館資料整備検討委員ほか。

主な著書

『肖像画の視線』吉川弘文館(一九九六)
『武家の肖像画』日本の美術史シリーズ 至文堂(一九九七)
『二千年の日本絵画史』青史出版(二〇一)

主な共著

『画壇統一に賭ける夢』文英堂(二〇〇一)
『戦国合戦図屏風集成』(川中島合戦・賤ヶ岳合戦図/長久手・長篠合戦図)
中央公論社(一九八〇〜八二)

新出の白鳥十郎長久書状

鈴木 勲

二〇〇五年三月発行「歴史館だより」の中で、武田喜八郎氏は天正十二年（一五八四）六月十二日付、山形殿（最上義光）宛伊達政宗書状を紹介されている。これが兵庫県立歴史博物館所蔵史料であること、しかもその内容に「白鳥井三氏家方生害之由」とあり、白鳥十郎の最期を物語る史料であること、更に最上義光による白鳥十郎の謀殺が、軍記・物語の枠を越えて、その年代をも含めてほぼ実証できる史料であること、などの諸点から最上氏並びに白鳥氏研究の一級史料であることは間違いない。と同時に、伊達氏や最上氏など

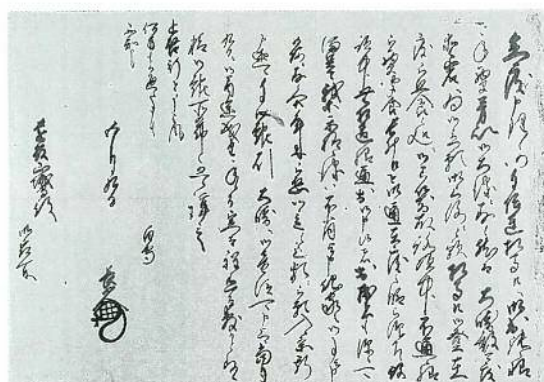
戦国大名史料は悉皆調査され、新史料の発見は期待できないとの勝手な思い込みにも再考を促すことになった。

事実、これに先立つて平成十四年二月には、青葉城資料展示館学芸員の大澤慶尋氏により神奈川県相模原市の湯村隆氏が所蔵する史料と、その中天正二年（一五七四）の最上の乱にかかわる四点の柴林書状が含まれていることが発見された。

これら書状内容の見事な解明は、大澤氏の『青葉城資料展示館研究報告―「天正二年最上の乱」の基礎的研究―に譲るが、その中で義光対柴林を中心

とする乱の構図が明らかとなり、西根衆の一員としての白鳥十郎の役割もまた明確になった意義は大きい。

更には、こうした発見に連動するかのように、平成二十一年、平川新氏らの宮城資料ネットの調査により、白石市教育委員会寄託遠藤家文書の存在が明らかになり、その中に約六〇点の中世史料が含まれていることが分つてきた。そして遠藤家中世史料発見の喜びの中、当の平川氏が河北町立中央図書館に史料調査に訪れ、遠藤家史料の中



1. 白鳥長久書状 天正九年五月九日
遠藤山城守宛（「遠藤家文書」白石市教育委員会）

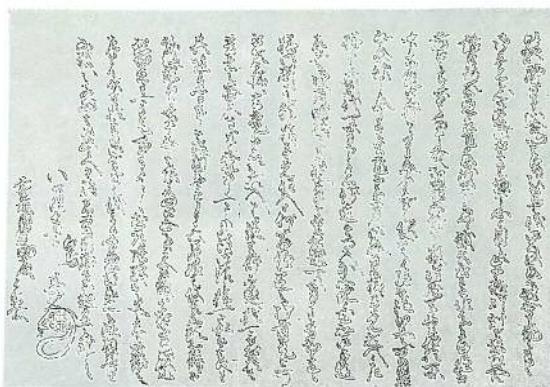
に白鳥長久書状が含まれていることを教えてくださったのである。

それは一拾三号、白鳥長久書状老通年号不知、遠藤文七郎」の包紙に収められた（天正九年、一五八二）五月九日付、遠藤山城守宛、白鳥長久の書状であり（写真参照1）、『性山公治家記録』天正九年五月九日条に、次のように記されている書状の原本であった。○九日 最上谷地城主白鳥十郎長久ヨ

リ遠藤山城方へ書状差遣ス、次ニ大崎左衛門督殿義隆今度愛宕へ立願ノ事有テ上洛セラル、相馬口御通り有タキ由被存ノ処ニ、御弓箭故路次不通ノ様ニ聞及ハレ、長井口通ラレタキ旨仰聞ラル、路次中無相違様ニ仰付ラレハ満足タルヘシ、当月九日首途ト承ル、程有ヘカラス、委細御報ニ待入ノ由、著セリ

ご承知の通り『性山公治家記録』は性山輝宗に関する伊達氏の正史であり、それだけ史料の収集には藩主綱宗の厳密さが反映され、諸大名家史中優れたものとされてきた。紛れもなくこの白鳥書状が遠藤家に伝わり、それが伊達氏の正史編さんの史料となっていたのである。武将に相応しい花押の中に、白鳥長久の実像を見ることができるようになった喜びは大きい。

しばらくして最上徳内記念館が「悲運の武将、白鳥十郎長久展」を開くことになり、この書状を借用するために鈴木正人学芸員が白石市に赴いたところ、写ではあるがもう一点、白鳥長久



2. 白鳥長久書状写 天正二年八月廿七日
遠藤内匠助宛（「遠藤家文書」白石市教育委員会）

書状が在することが分つた。

それは「式拾三号、白鳥長久ヨリ遠藤内匠信君江之書簡、写老通」の包紙に収められた（天正二年）八月二十七日付、遠藤内匠助宛、白鳥長久の書状であった（写真参照2）。これもまた『性山公治家記録』に「白鳥十郎長久ヨリ遠藤内匠所へ書状差遣ス」として詳しく紹介されているもので、天正二年の最上の乱解明には欠くことのできない史料であった。

二点の書状と記録を読み比べながら、南奥羽における白鳥長久の果たした役割を解明することが今後の課題となる。

（付）白石市教育委員会・最上徳内記念館・並びに東北大学平川新氏に感謝を申し上げます。

（河北町誌編さん専門員／河北郷土史研究会会長）

義光公たより

No. 2
2012年3月



題字 齋藤蕉石

最上義光歴史館ボランティア活動

出張こども講座「ヨシアキ☆すくくる!?」の取り組み(その2)

昨年度の義光会だよりは、なぜ出張してまで児童に講座をやるうとしたのかをテーマに実施までの取り組みを紹介しましたが、今年度は実践状況をお知らせいたします。

義光公を知って頂く為始めた講座ですが、今年度は小学校十校児童数四六六人の四年生を対象に講座をおこないました。希望会員を五つの班(五〜六名)に分け、各班のリーダーを中心に特徴を生かした練習を重ねて講座に臨みました。

義光スクールの資料作成メンバーを事務局として、より分かりやすく編集し各班から出された課題を資料に反映させ十一回程度の修正をおこない講座資料を作



小学校での最上義光物語の熱演

成いたしました。

講座の構成は、最上義光公のよびかたはから始まり「最上家の家系」「どんな事を行った武将か」「どんな人物だったか」「義光公が亡くなった後の山形はどうなったか」と大きく四つに分け、郷土の歴史内容も加え四年生に解り易い内容としました。

なかでも連歌や源氏物語などを得意とした文化人の義光公の説明には苦労しました。

また、長谷堂合戦の説明では小学生に分かりやすいように三年前のNHK大河ドラマ天地人放映された北の関ヶ原での義光公登場の動画も入れました。

講座の進め方は、児童がどこまで理解してくれているか、どうしたら集中力を維持させられるか、一方的な説明にならないだろうか、など内容を充実させる為に講座の中で確認する役割も決め、終了後には報告書をもとに改善点を検討、次の学校により解り易い内容へと修正していきました。

講座では多くの質問もありました。義光公はどんな病気でなくなったのか、戦いは何勝何敗か、指揮棒は何処で誰がつくったのか、一日町、九日町はなぜ山形にはないのかなど、児童たちのフレッシュな質問に回答に窮した場面も多かったです。

このような努力もあり義光公の名前の呼び方は、ほとんどの児童が「よしあき」と呼んでくれるようになり心が熱くなりました。

講座を始めてから新聞やテレビに採りあげられたり、児童が自主的に行う発表の集いでは、最上義光物語の劇をしてくれる学校も出てまいりました。

児童達の反応は、感性豊かでありスタッフ一同心が熱くなる場面が数多くありました。講座の最後には、記念として歴史館から修了証を参加者全員に差し上げております。

学校の先生からもアンケートにより改善内容、意見なども頂いておりますので、来年度はより内容を改善して、分かり易い楽しい出張こども講座「ヨシアキ☆すくくる!?」を実施し義光公を全国区にしていきたいと思っております。

最後に事前打合せや貴重な授業時間をいただいた先生方にこの場をかりてお礼申し上げます。ありがとうございます。

会員の資質向上に向けて

今年度実施した研修、講習会の中から三点ほど紹介します。

1. 義光公の妹(義姫)と甥(政宗)ゆかりの地仙台を訪ね、神社、お寺、城跡、博物館などを見学し知識を深め、そこのボランティアガイドの方々対応なども勉強しました。
2. 国際ドキュメンタリー映画祭に併せ、海外からのお客様に対応する為、英語での挨拶などの勉強会もしました。今でも週に一時間、数名が集まり勉強中です。でもまだまだ案内はできませんが何時かはとがんばっています。
3. お客様の安全を図る為にAED講習会を開き、知識と技術を習得しました。皆、真剣に汗を流しながら取り組みました。

このような研修、講習会を通じ、会

員の資質を向上し来館者へ満足いくガイドをするだけでなく会員同士の親睦も深めています。みなさんも私達と一緒に最上義光歴史館で最上義光公を中心とした展示品のガイドを試してみませんか？



① 覚範寺の義姫(小さい方)と4男のお墓



② 展示場での英会話の勉強



③ 大丈夫ですか? AED講習会

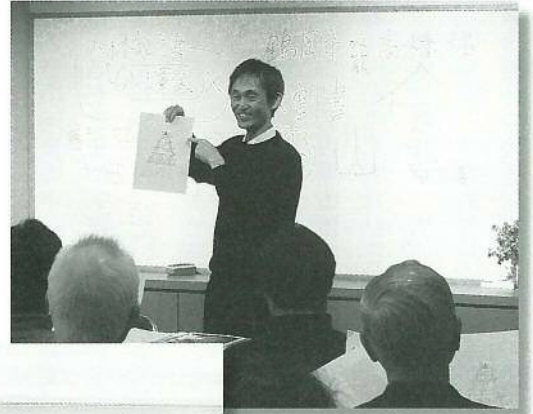
編集後記

昨年度から開始した四年生への出前講座「ヨシアキ☆すくくる!?」は、会員皆様の努力により、先生方からの評判も良く今年も終了することが出来ました。新世代へ向けての取組みに、意欲が感じられました。歴史は、楽しく深く新しい事実の解明で進化することを、共に学びました。義光会の活動が、益々充実しますよう会員の活躍に期待いたします。(榎谷)

○平成23年度 事業スナップ



○はながたベニちゃんと義光会会長のツースhoot!! CATVYの山形市文化施設紹介番組に出演



○謎の天守閣図面 山形城にも天守閣計画!? 吉田教授の義光塾!!



○義光と兼続でパチリ☆ 山形県住みます芸人 三浦友加さん来館!!

※最上義光歴史館の最新情報は
公式ホームページをご覧ください。
<http://mogamiyoshiaki.jp>



○こども講座「ヨシアキ☆すく〜る!」 「義光公の指揮棒…意外に重いな!!」村木沢小学校4年生



○拓本と裏打ちの体験講座「なかなか難しいぞ!!」

平成23年度事業

○企画展 《4月1日〜同10日 前年度継続》
「市民の宝モノ2011」展

○常設展示Ⅰ 《4月11日〜7月10日》
「鐵[Kurogane]の美2011」〜郷土の刀工たち〜

○特別公開「坂紀伊守像」 《4月26日〜5月15日》
○常設展示Ⅱ 《7月12日〜10月10日》
「女性のお洒落と装い」〜パネル展示「最上義光ゆかりの女性たち」

○企画展 《10月12日〜1月9日》
よみがえる山形城
「職人たちの技の記憶」

〜本丸一文字門発掘調査の成果より〜

○企画展 《1月11日〜4月8日》
「市民の宝モノ2012」
〜卒業存続〜と
「最上義光公百万石行絵列絵巻」



○歴史講座

サポーター養成講座「義光塾」 会場/最上義光歴史館 研修室

・6月18日 「山形の歴史を語る会 第1回テーマ「最上義光とまがた」 講師/片桐繁雄氏

・9月26日 「館内案内のための英語講座」 講師/リサ・ソマーズ氏

・10月15日 「山形城本丸一文字門の発掘調査の成果について」 講師/五十嵐貴久氏

・12月14日 「山形の歴史を語る会 第2回テーマ「最上義光と女性たち」 講師/片桐繁雄氏

・2月25日 「謎の天守閣図面―山形城にも天守閣計画?」 講師/吉田 敏氏

○歴史講座

「拓本と裏打ちの体験講座」 《3月3日、10日、17日》

会場/最上義光歴史館 研修室 ・講師/土屋威夫氏

○こども講座

「ヨシアキ☆すく〜る!」―山形の殿様、義光公を知ろう!―

講師/最上義光歴史館サポータークラブ「義光会」

・7月20日 山形市立大曾根小学校 4年生

・10月6日 山形市立立本小学校 4年生

・10月7日 山形市立第四小学校 4年生

・10月12日 山形市立第七小学校 4年生

・10月14日 山形市立西山形小学校 4年生

・10月18日 山形市立村木沢小学校 4年生

・10月25日 山形市立立本小学校 4年生

・12月1日 山形市立第一小学校 4年生

・12月6日 山形市立みはらしの丘小学校 4年生

・12月16日 山形大学附属小学校 4年生

文禄四、五年の謎

長谷勘三郎

文禄四（一五九五）年八月、秀次事件で駒姫が三条河原で刑死した。その二七日（ふたなのか）には、妻が急死した。愛する者二人を一挙に失った義光の悲嘆、いかばかりか、自らは閉門蟄居。連歌の師里村紹巴も財産没収のうえ、近江へ流罪。最上家にとつては存亡に関わる重大事件の年であった。好きな連歌も、年末の十二月十六日になつてようやく開催できたらしい。発句は義光。

「入る月の影やとどめし雪の庭」
以下、悲愁感ただよう百韻となる。

このときの連衆の中に「弥阿」なる時宗僧の名があるが、ほかの連歌にこの名は見えない。いったい何者かという疑問を持ったまま時が過ぎた。

ところが、最近驚くような史料が現れた。一つは名古屋博物館から、一つは地元山形市光明寺から。

二つの新史料によって、山形を代表する二大寺院、すなわち時宗光明寺・真言宗宝幢寺の住僧が、このころ京畿

周辺で動いていた事実が明らかになつたのである。

まず、宝幢寺尊海。義光の信頼絶大な祈禱僧である。彼は、年が明けたばかりの文禄五年正月三日、尾張国（愛知県）知多の圓藏寺に伝来する美麗な古写経の末尾に、「羽州山形殿」子孫の末長い繁栄を祈る願文を書き留めていた。（名古屋博物館紀要第三二十四号、鳥居氏・橋村氏論文）

次に、光明寺の弥阿。彼は、同じ年の五月下旬に里村紹巴の発句揮毫を手に入れていた。紹巴自身「最上光明寺弥阿の御所望により」と、そのいきさつを記した（光明寺蔵軸物）。前年十二月十六日の連歌に参席したのは、この「弥阿」（光明寺第十七世俊山）だったと考えてよからう。

それなら、尊海、弥阿の二人がこの時上京していたのは何故か。弥阿の紹巴訪問は、義光同道ではなかつたか。

文禄五年の両者の動きは、最上氏内部の事情によるものであろうし、それは即義光自身の意向と密接な関わりをもつものだったに違いない。

想像をめぐらすことは可能だが、それはやはり想像にとどまる。さらなる史料の出現が待たれるところだ。

平成24年度事業

1. 展示事業

(1) 企画展

①「市民の宝モノ」展（継続企画）（1月～4月）
山形市民を対象に、所蔵する「宝モノ」を募集して展示し、広く一般に公開する市民参加型の展示会です。

(2) 常設展示

最上義光を中心とした最上家関係資料と山形城閣係資料、山形に関わる文化財などを展示紹介しながらテーマを定めて一部コーナー展示を行います。

2. 普及啓発事業

(1) 歴史講座

①「義光塾」
歴史館サポーターを対象とした、スキルアップを目的とした勉強会です。

(2) 「郷土史講座」

一般市民を対象とした、最上義光や郷土史、文化財などについて学習します。

(2) こども講座「ヨシアキ☆くくる!?」

山形市内の小学校に出向き、最上義光を中心に郷土の歴史や文化を学ぶ機会をつくり、郷土史に対する関心と理解を深め、愛郷心を育てる一助とします。

3. 調査研究事業

(1) 最上家関係資料・史跡調査（継続事業）

県内外に残る最上家等に関わる文書資料や文化財・史跡などの調査研究を進め、写真撮影等による記録保存及び目録作成、複写等の資料整備を行います。その成果を紹介します。

4. その他の事業

(1) Tに係わる企画と情報管理

歴史館のホームページを活用して様々な情報を発信するとともに、企画から物販まで幅広く事業を展開していきます。

(2) 「館だより」の発行（年1回）

事業報告や考察、山形の歴史や最上家に関する情報を広く一般に提供します。

※詳細については最上義光歴史館にお問い合わせください。

表紙の資料

大坂夏の陣図（模本）（写真は部分）

紙本着色／寛政十一年 小俣七郎模写
江戸時代（十八世紀）
縦×横 八〇・〇×一八九・一

本図は、最上家に伝来した「大坂夏の陣図屏風」を寛政十一年（一七九九）に山形藩秋元家の家臣小俣七郎が模写したものです。原図が最上家ゆかりの屏風であることから通称「最上屏風」と呼ばれています。全国に同様の模本が多数確認され、遠く海外の博物館にも所蔵されていることがわかっています。原本の屏風は、最上家改易後、最上義光の菩提寺光禅寺に納められ、明治二十七年の市南の大火のときに消失したのか？「なぜ多数の模本が制作されたのか？」「本当に大坂夏の陣の様子を描いたものなのか？」「それが描かせ、なぜ最上家に伝来したのか？」詳細については二～四頁の宮島新一氏の論文をご覧ください。

ご利用について

開館時間 午前9時から午後4時30分
入館料 無料
休館日 月曜日（国民の祝日となる場合はその翌日）
12月29日から1月3日
J R山形駅より徒歩約15分
大石町バス停留所より徒歩1分

来館案内図



平成24年3月発行
編集・発行 財団法人山形市文化振興事業団
最上義光歴史館
〒990-1004
山形市大手町1-5-3
023-1625-1153
023-1625-1710
023-1625-1710
http://ogamiyoshiki.jp
印刷 株式会社大風印刷

